



鑑定や亜空間倉庫がチートと 言われてるけど、それだけで 異世界は生きていけるのか 3

α L P H α L I G H T

はがき
Hagaki



登場人物紹介

CHARACTER

モーラ

元『桜花乱舞』のメンバー。人族と巨人族のハーフ。

メイ

元『桜花乱舞』のメンバー。エルフで元シスター。

ヨシト＝サカザキ

本編の主人公。ある日突然、目が覚めたら異世界にいた。ややスケベ。

リモア

自称ヴァンパイア。双剣を使い、圧倒的な実力を持つ。

アリサ

元『桜花乱舞』のメンバー。前世はヨシトの幼馴染だった。

メリッサ

犬人族のボーター。ヨシトとパーティーを組む。

シマ

魔獣ホワイフェンリル。なぜかヨシトとアリサに懐いている。

目次

第二章 ヨシト、エルフを知る 7

第二章 ヨシト、再会する 86

第三章 ヨシト、迷宮の最深部^{さいしんぶ}に至^{いた}る 175

エピソード 290

第二章 ヨシト、エルフを知る

俺——ヨシトⅡサカザキは、体にある紋章もんしやうの謎を探るため、四姫桜しきざくらのみんなとは別れ、シマとともにフェル王国の首都フェイダーを目指していた。

途中で立ち寄ったケーンズ王国の王都にいた、御者ごしやのダングズに方位磁針ほういじしんをかうと同時に、道を聞いているので問題ない。

方位磁針の棒の色の付いてないほうの、左に少しずれた向きを進め、と。

つまり、フェル王国は南にある。

つまり、フェル王国は南にある。今更いまさらながら、この世界の単位や時間、太陽や月の動きなどは地球と同じだった。いや、厳密げんみつに同じかはわからないものの、感覚的には同じに思える。

今は昼過ぎ。少し方向の補正ほせいをして、南を目指して歩く。

道中では、やはり魔物が出た。

だが、多分俺は魔物に慣れたのだろう、亜空間倉庫と剣で難なんなく倒すことができた。

それと、オークに初めて遭遇くわいごした。オークは、かろうじて人型ではあったが、コボルト

の豚^{ぶた}バージョンと表現した方がいい姿だった。人間の頭の部分に豚^{ぶた}の頭が乗っているのだ。手も、豚^{ぶた}の蹄^{ひづめ}と親指の三本だった。読んできたラノベとはずいぶん違う。オークは力が強そうだったので、亜空間倉庫で輪^わ切りにした。死体は放置しようと思っただが、ほっとけば狼などを呼び寄せそうだし、燃やすのも手間だ。フェイダーの冒険者ギルドに売ることにして、亜空間倉庫に収納した。

夜になり、木が少ない場所を見つけた。周囲の丈^{さか}の低い木や草をミスリルの剣で刈^かり取り、空き地を作る。

そして、テントを張る。

その後に風呂を沸^わかした。

この七日間、ともに野営ができる場所がなく風呂に入れていないから、まずはさっぱりしたかった。

ふいに地面が揺れる。

「ん？ 地震か？ まあ、地震くらいあるか」

風呂の魅力の前ではどうでもいいことだった。

——実はこの地震が、アリスとメリッサの喧嘩^{けんか}によるものだと後になって知ることとなる。たかが喧嘩で地震まで起こすとは……

俺はゆっくりと五右衛門風呂に浸かる。

「あ。あ。あああああ」

湯がこぼれ、炭になった火種にかかり煙^{けむり}が上がる。

「……最高だ」

しみじみそう思う。

俺は思っていた。なぜラノベの主人公は異世界に行きたがるくせに、日本のものを求めるのかと。バカなんじゃないかと。そんなに日本の食べ物、日本の施設、日本の文化が好きなら、異世界になんて行く必要と。

だが、馬鹿は俺だった。

「体に染みついたものは、そんな簡単には消えないんだな」

体を拭^ふき、予備の服に着替え、シャカシャカジャージを木の実の洗剤で洗い、木の枝に干^はす。

テーブルや椅子^{いす}を展開し、飯を炊^たいて、ここで取れたオークは使わずに、買っておいだ鶏肉^{とりにく}のような肉を出す。これを焼いて焼き目がついたら、醤油、砂糖、水を入れて照^てりが出るまでさらに焼いていく。鶏の照り焼きだ。

これを切つてご飯に載^のせ——

「そーれは、我慢^{がまん}できないよー」

「おわあああああー」

急にどこからかアニメ声みたいな女の声が聞こえた。俺は全く警戒していなかったもので、すっとんきょうな声を出してしまった。だが一緒にいるシマは、頭上の一点を険しい顔で睨みつけつつ、牙を剥き出しにして唸り声を上げている。

(珍しい……シマが戦闘態勢?)

普段、戦う素振りも見せず、昼行燈のようなシマが、明らかに警戒を見せている。俺がシマの視線の先に目をやると、そこには女が浮いていた。

身長はアリサよりも小さく見える。胸はかなり慎ましい。お尻はブリっとしてるが大きな。一言で言えば幼女だ。

髪は藤色で背中まで伸ばし、背中には小さなコウモリの羽のようなものが生えている。

服は……衣類というのか、これは。モータよりひどい。

極端に布地が少ないビキニの黒ブラと、ローライズも真つ青、局所しか隠れてないようなビキニの黒パンツを穿いている。今時、グラビアアイドルでも着なそうな水着だ。

足には真つ黒な、膝までの長さのブーツを履いていて、狙ってる感が凄ましい。

そんな女が突然現れた。だが、俺はそれを知っている。

「サキュバス……」

「ちっがうよ！ リモアはヴァンパイアだよっ！」



「いやいやいやいや、まんまじゃねーか。サキュバス以外ないだろ。実は、この世界ではサキュバスはヴァンパイアって呼ぶとかだろ」

「だから違うって！ ヴァ・ン・パ・イ・ア！」

サキュバスは、指を一本立て、ボタンを押すように、言葉に合わせてその指を動かす。

『ヴウウウウ』

シマは、いきなり現れたロリサキュバスもどきに威嚇^{いかく}するが、ロリサキュバスは相手にしなかった。

そしてロリサキュバスは、外見に似つかわしくない薄暗^えい笑みを浮かべて、シマに向けて口を開いた。

「Њјгизилндчомб,@Жкиомндлио」

(まさかあんたがここにいるなんて、さすがに予想外だったよ)

「なんだって？」

ロリサキュバスは全く意味がわからない言葉を発した。しかも狼のシマに対してだ。だが、俺が真に度肝^{どき}を抜かれたのは、次の瞬間だった。

「Љепиљшрлнху,Џцфдлршђмбимн

вп」

(龍神王の手先が何用だ、失敗の後始末を付けに来たか)

「は？ はあ!？」

喋^{しゃべ}った。確かにシマが喋^{しゃべ}った。

元々人族の言葉を理解している節^{ふし}は見せていたが、言葉を発することはなかった。今回は意味不明ではあるが、はっきりと言語を口にした。

俺が放心している間にも、ロリサキュバスとシマの会話は続く。

「ПКГнуиФлхкс,ЉчФмвичдцкм」

(そうとも言えるかもしれないし、違うとも言えるね)

「ШД,Икфјицллк,Екцђжжфкјео」

(去れ、さもなくばその細首、噛^かみ砕^{くだ}いてやる)

「АфФфФ!Ѕпшчдјкфодјујувлсм
Д!？」

(あはははっ！ そんな力の出がらしみたいな獣^{けもの}の体でリモアを殺すつもり!?)

ロリサキュバスは見た目相応の笑い声を上げたかと思うと、目をすうっと細めて、殺気を放ちはじめた。

シマはそれに反応しようとするも、ロリサキュバスはまるで瞬間移動のような速度でシマの鼻先まで近づくと、頭を掴^{つか}んで地面に叩^{たた}きつけた。

『ギャンー!』

「亜空間倉庫!!」

俺が輪切りにしようと亜空間倉庫を展開するも、ロリサキュバスはまたもや瞬間移動のようにその場から消えて、これを避けた。

「……くそっ、最近こんなばっかだな」

「ちよつとおゝ、危ないじゃないっ♪」

「黙れ、サキュバス」

「んもう、ヴァンパイアだってばっ!」

「うるせえ」

「それに、リモアは戦いに来たんじゃないよ」

ロリサキュバスは一瞬で、俺と唇が触れ合いそうな距離にまで近づいてきた。

「ほらっ、殺るならもうとつくに殺つてから」

「……」

俺はびつくりする間もなく、自分の首に痛みがあることに気づく。背中から冷や汗が一気に噴き出す。

幼女のようなロリサキュバスの左手が、俺の喉を突いていたのだ。

(全く見えない……。こ、これは無理だ……)

確かに、これでは命を握られているようなものだ。

『ウォーン!』

頭を上げて俺の状況を見たシマは、ロリサキュバスに飛びかかる。だが、ロリサキュバスはまたもや避けた。そして、自身の指についた俺の血をペロリと舐めると、大きく目を見開いた。

だがそれは一瞬だけで、すぐさまシマにまたおかしな言語で話しかける。

「Ок гз км фил кх хил。Имв фзич ћ а н в г и л н б х у о к?」

(あんだとも今は敵対するつもりはない。それに目的はこちらと同じはずじゃない?)

『……Фмл ђ а љ ш л м б х у л к?』

(……迷宮最深部まで連れていくつもりか?)

「Ер. Сплмвхолбгфилашш љ мх? Шлбф ј мччм
ггк?」

(そう。それに今のこいつじゃ最下層にたどり着けないよ。わかってるわよね?)

『……』

「あー、その、なんだ。なんの話してんだよ。俺にもわかるように話せよ」

俺が間に入るも、完全にスルーされて話は続く。

「Љ п ј г ф г ј л ч м х х и л。А п л ј г ѕ о л н

（そんな半端はんぱな分身体のあんたじゃ無理。だからリモアが連れてつてあげる）

«Афф, Ашбгу? Хлнгфумнвгкнпшт. Икбцгпкдн
нк.» III њ мнлнвдриднл?»

.....

「……な、なんだよ」

「あはっ！ 決まりだねっ！ リモアはリモア！ これからよろしくねっ！」

「はあ？ どういうことだよ。おい、シマ。おい」

「くそっ、どうなつてやがる」

「……はあ………食うか？」

ロリサキユバスは勢いよく鶏照り焼き丼を食べ出した。

か？
争うつもり
鑑定

オリハルコン級ΦPK-β

詳細不明

俺はワインを注ぐうと手にしていたコップを思わず落としてしまった。

「……オリハルコン級って……ミスリルまでじゃねーのかよ。でも本当にヴァンパイアだ。魔物の種別が文字化けみたいになっててわからねー。けど、人間ならステータスやスキル、名前とかの詳細が出るから、魔物なのは間違いないな」

「はむっ、はむっ、はむっ、んぐっ……んんん！」

ヴァンパイアは飯を掻き込みすぎて、喉に詰まらせた。

（ガキかよ……）

俺は、サキュバス改めヴァンパイアに、コップの水を出してやる。

俺もワインを注ぎ直して飲む。

「……説明する気はあるんだろうな？」

飯に夢中なロリヴァンパイアに問うも、彼女もシマも答えてはくれなかった。

「……ったく、やってらんねえぜ」

俺はワインを勢いよく呷った。

その後、食事を終えて落ち着いたリモアに、改めて問いかける。

「で、お前の目的はなんだ？ シマとどういう関係だ？ 何語で話してた？ 俺はそれを

覚えられるのか？」

「そおんな、いっぱい聞かれても、リモア、まいっちゃうつ！」

「てめえ……」

リモアは両手を自身の頬に当て、モジモジと体をくねらせる。その態度にイラッとする。一方のシマは、さっきまでのイザコザがなかったかのように我関せずといった態度を取っている。

「これから迷宮に行くんでしょ？ リモアが手伝ってあげるっ！」

「はあ？」

俺は足元のシマに目線を落とす。やはり、うずくまったままだ。

ダメだこいつは。もう使い物にならない。

（仕方ねえ、自分で聞き出すか）

「いらねえよ。俺には他にも仲間がいる」

「迷宮はとぉうつても危ないんだよっ？ 死んじやうよ？」

「死なねえようにゆっくりやるさ」

「人族がどんなにいても無理だつてばっ！ ほんととぉーに、危ないんだからっ！」

「お前に関係ねえだろ。別に何十年かかってもいいんだ。最悪、最下層なんてたどり着かなくても構わないしな」

「それはどうかと思うよっ？ それに、その狼だつてそうなら困るんじゃないかなっ!？」

「あん？」

すると、シマは頭だけを上げて、俺を黙って見つめてきた。

「……」

「……おいシマ。お前の目的は、迷宮の最下層なのか？」

「……」

「話せるんなら話せよ」

「……」

「ちつ、なんなんだよ一体。こいつとは話せて、俺とは無理なのか？　どういうこと？」
だがシマは語らない。目線だけで訴えてくる。

「ちつ、わあーったよ！　でも、フェル王国に行くのが先だ」

「あつ、エルフの国だねつ。そんなところに何しにいくの？」

「手紙を届けに行く。それと俺の紋章について調べてるんだ。これがなんなのか、な」

俺は首筋を見せる。すると、リモアはスツと目を細めた。

「ふーっん、知らないんだ。そんなのリモアに聞けばいいのにつ」

「……は？」

意味がわからない。

「だからっ！　リモアが教えてあげるってっ！」

「はああああ!？」

俺はテーブルに手をつき、立ち上がる。

「不滅の龍の紋章のことが知りたいんでしょ？」

リモアは、さも当たり前のように言う。

「……なんだって？」

「だ・か・ら・っ！　エターナルマザー——」

「待て待てマテ待て」

俺は右の手のひらをリモアに向け、話を遮る。

「エターナル？　龍の紋章じゃないのか？」

「ううん、それは、不滅の龍の紋章だよっ」

「なんだよその、相手は死ぬみたいな名前は……」

「何言ってるの？」

「いや、いいんだよ……。俺のは普通の紋章と違うのか？」

リモアは腰に両手を当てて、

「そうだよ、それは母なる意思を継ぐ本物の龍の紋章だよっ！　どう？　リモア偉いっ!？」

物知りでしょっ！

「……………」

（おいおい……まだ聖女神教会の情報も把握しきれてないのに、どんどん設定を盛るんじゃないよ。つかそんなことを知ってるって、お前何者だよ）

「ち、ちなみにお前、歳はいくつだ？」

リモアはまた考え込んでから、ニパツと笑う。

「ん〜、わかんない！ リモア、魔物になったのは初めてだからっ」

「は？」

「あっ！」

リモアはわざとらしく、右の手のひらを広げて「言っちゃった！」という仕草をする。それから両手を前に突き出し、手首を振る。

「今のなしっ！ なしだからねっ！」

「……………」

（なんだこいつ。ガキみたいだったり、暗殺者みたいな顔をしたり、それでいて見た目はロリヴァンパイア？ つうか、魔物だよな？）

「あー、とりあえず、エターナルがつくやつとつかないやつの違いを教えてください」

リモアの話はこうだった――

昔、母なる龍がいた。

母なる龍は世界の調和を願い、自身の体を三十三個に砕いた。

そして、砕いた体を力に変え、世界にばらまいた。

それが龍の紋章だ。

龍の紋章が宿ったものには、宿主の素質に合わせた大きな力が与えられる。

紋章ごとに力が決まっているのではなく、紋章を宿した者に合わせて力が決まるのだ。失われた秘術を使うと、他人の紋章を奪い取ることもできるらしい。

紋章を持つ者が死ぬと、紋章は消えてまだどこかの誰かに宿る。

――という感じだ。

「うんと、俺の幼馴染は龍の神様みたいなやつに、龍の紋章を三つ貰ってるんだが？」

「あっ、それあなたのだねっ」

「……俺の？」

「うんっ、龍神王様があなたから奪って、別の異世界人につけたって言ってたから」

「はいいい！」

「あっ！ また言っちゃった！」

「……………」

（どうなっついてやる……。俺から奪ってアリサにつけた？ つうか、龍神王って言ったか？ ……こいつ、龍神王の手先なのか？）

リモアは、吹けない口笛をヒューヒューと鳴らして、そっぽを向く。

「……なら次だ。俺のエターナルなんちゃらはなんなんだ？」

「それはねえ、詳しくはわかってないのっ。でも、母なる龍様の意思が宿ってるって言われてるみたいっ」

「あー、その龍神王ってやつでもわからないのか？」

リモアは首をコテンとかしげる。

「あれっ？　なんであなたは龍神王様を知ってるの？」

「知らねえよ、今お前が言ったんじゃねえか」

「あれっ？　そうだっけ？」

「そうだよ、で、その龍神王も知らないのか？」

「うんっ、あーもしかしたら知ってるかも。リモア、わかんないっ」

「そっか」

（こいつバカだな。これなら、いくら強くても扱いやすい、なんとかなりそうさ。しかし、疑問が減っても減ってもどんどん増えやがる……。とはいえ、少しずつ進んではいるな。こいつの雰囲気からすると、引つ張れるのはこのくらいか。言わないこともあるくさいし）

「まあいい。で、本当についてくるのか？」

「もっちゃん！」

「なんでだよ、お前に利点がないだろ？　何が目的だ？」

リモアはニマアと口を横に広げる。

「んふふふ、それがあるんだなあ」

「……なんだ？」

リモアは椅子の座面に立ち、指を立てながら言う。

「一つ！　あなたのご飯美味いから！　もつと食べてみたいっ！　二つ！　あなたの血が美味しいから！　リモア、ヴァンパイアだしっ！　三つ！　あなた、すぐ死ぬし！　守ってあげないっ！」

「そんだけ？　……ぶっちゃけ、お前のことをまだ信用したわけじゃないんだが？」

「ふう。リモアって呼んで！」

「……リモア、俺はお前と行動したいと思うほど信用してない」

「でも迷宮行くんだよねっ？　なら、リモアがいた方がいいと思うなあ」

「いや、俺たちは自分で——」

「ムリムリ——っ！　絶対ムリだよっ！　百階層までは、ほんっとーに大変なんだからっ！」

「ん？　百階層が最後なのか？」

「そうだよっ！　迷宮の下層は魔物が本つつ当に強いんだよっ！　リモアだって危ないく

らいつ」

「マジかよ……」

（オリハルコン級、しかも、モータたちが強いと確信しているシマでさえまったく歯が立たないリモアが負ける？ そんなかよ……戦力はあったほうが安心か？）

「………本当についてくるのか？」

「しっつこおい！」

リモアは両手を腰に当てて、薄い胸を張る。

「あつ、血はちようだいねっ♪」

「……血はどのくらい必要なんだ？」

「んっっ、七日でこのコップ一杯でいいよっ」

（献血程度だな）

「最後に。リモアと一緒に来るなら、何か俺が安心できる材料が欲しい。いきなり現れていきなりシマと戦って、しまいには一緒に来ると言われても、信用しきれねえよ」

「むっ」

リモアは頬をぷくりと膨らませると、また腰に手を当てて胸を張った。

「仕方ないなあ！ じゃあ、契約してあげるよっ！」

「契約？」

「あなたは、リモアにご飯と血をくれる。それとずっと一緒にいる。リモアはあなたを手伝う、外敵から守る。これで契約しよっ！」

「……それは絶対なのか？」

リモアの目がキラリと光る。

「うんっ！ 契約は絶対だよっ！ 契約違反はお互いの死に繋がるから。契約内容通りねっ！」

（本当に契約が絶対なら、身の安全の保証になる。まさかこれが嘘の契約ってことはないだろう。そんなことする必要がないくらい、簡単に俺を殺せるんだから……。契約までのならアリだな）

「……わかった、契約しよう」

「あなた、名前は？」

「ヨシト＝サカザギだ」

「わかったっ！」

リモアは俺の前まで来て目をつむり、両手を前に出す。するとそこに三十センチほどの魔法陣が出現した。

リモアは透き通るような、しかし小さい声で詠唱を始める。

《我、ヨシト＝サカザギと契約する》

《汝、血と食の盟約を結ぶ者なり》
 《汝、離ることなかれ》

《我は汝を外敵から護る者なり》

リモアはゆっくりと目を開ける。

何も言わないが、魔法陣に手を当てればいいのか。

俺はゆっくりとリモアの両手に合わせるように、魔法陣に手のひらを当てる。すると、

魔法陣が光を放った。

《今、双方の合意のもと、成立せり》

「契約！」

体になんかが流れる感覚があった後、魔法陣が消え去った。



夜の見張りは完全に必要なくなった。

元々魔物が接近すれば、シマが確実に教えてくれたのだが、リモアは敵が近づけば俺が視認する前に倒してくれる。そもそも、リモアがいるとはほとんどの魔物が近づかないらしい。

鉄級はもちろんのこと、銅級、銀級あたりは、百パーセント近づいてこないらしい。便利だ。

普通、強い魔物の方が知能が高く、相手の力量を察知したりして、近づいてこないようなものだが、リモアはかなり気配を抑えているらしく、金級からしたら同等ぐらいに感じるそうだ。

「じゃっ、さっそくっ、血をもらうねっ！」

テントに入り、俺がベッドに座ると、リモアはそう言った。

それはいい、契約したんだから。ただ唐突だったので面食らってしまった。

「……本当に吸うんだな……」

そして、ニヤニヤと嬉しそうな顔をする。

「んふふっ、楽しみっ！」

「コップ一杯分だろうか？」

「大丈夫だって！」

「こえーんだよ！」

「くどすぎい。殺すつもりはないって言うてるでしょ!? 契約したもん」

「……わかったよ……」

俺がもたもたしていると、リモアは子供が待ちきれないときのように、両手をグーにして

自身の胸の前でブンブンと振る。

「ほらっ、早くっ！ さっきちよつと舐めたとき、ちよっ……美味しかったのっ！」

「なんだよ、ちよっ……っ……」

俺は観念して、上着の首回りを手で広げた。

「んふふ……」

リモアが、ベッドに腰かける俺の腿にまたがって座る。向かい合う形になったわけだ。

リモアは見た目は可愛らしく、扇情的な格好をしているが、俺はロリコンではないので反応することはない。これがモーラあたりならちよつとヤバイかもしれないけどな。

「……」

「じゃっ、いっただっきま……すっ！ かぶっ！」

リモアは小さな口で俺の首に噛みついてくる。

「あっ」

俺は小さな声を出して、気を失った。



翌朝目覚めると、俺はベッドに寝ていた。

隣では幼女が黒のビキニ姿で大の字になり、可愛い寝息を立てている。テントの中の床を見ると、シマもまるまっで寝ていた。

「……本当に魔物は寄ってこないんだな……」

今までの経験から、シマの察知能力の高さは知っている。そのシマがここまで安心してゐるならば、リモアが言っていたことは真実なのだろう。

ふと、俺は首に手を当てる。

歯形のような傷はなさそうだ。リモアが消したのでろうか。しかし、コップ一杯と言ったくせに、俺は気を失った。まあこれといって体調に変化はない。本当に問題ないくらい量の量だったのだろう。

テントから出て、食事の準備をする。

朝だからおにぎり味噌汁だ。

「……んう……おはよう……」

「まんまガキだな」

リモアが起きてきて、眠そうな目を擦りながらテーブルにつく。

大体、ヴァンパイアって夜寝るのかよ。それで朝起きるとか、どんな設定だと問いつめたい。

リモアは黙っておにぎりを食べ、味噌汁を飲んだ。

「なあ、リモア。お前、十字架とかにんにくとか大丈夫なの？」

「んう？ だーいじょーぶ……」

まだ寝ぼけているらしい。

いらないかまどや椅子、風呂セットなどを片づけて、出発の準備をする。

テントを収納するころには、やっとリモアも調子が戻ってきた。

「よしっ、じゃっ、行こっか！」

「はいはい」

俺たちは南に向かって歩き出した。



フェル王国に向かって歩いているが、一切の魔物と遭遇しない。安全は安全なのだが、リモアがどの程度の戦闘力なのか、この目で確認をしたかったのに、それができない。

「なあ、言いたいことはあるが、まずは歩いてくれねーか？」

リモアは俺の隣を飛んでいるのだ。

「えーっっっ、チョーめんどいつ」

「コギャルか、お前は……」

時代を感じさせる単語を出しても、リモアはまったく意に介さずに飛び続ける。

「フェル王国に行ったときに、お前が魔物だとバレると面倒なんだが」

「そーんなの全部っ、ぶっ——あーエルフかり、仕方ないなあ」

リモアはぶつぶつ言いながら、地上に降りて歩き出した。

「それとさ、魔物が出ないとちよっと困るんだが」

「ん？ なんでっ」

リモアは首をかしげて、俺を見上げる。

「リモアがどのくらい戦えるのか見たかったんだよ」

だが、リモアは意味がわからないという顔をする。

「食べるの？」

「いや、食いはしないが」

「食べないのに殺すの？ あとで食べるの？」

単純な言葉のやり取りだが、何か不穏な壁を感じる。

俺が言葉に詰まっていると、リモアが問いを投げかけてくる。

「何のために殺すの？」

リモアの表情は、純真な子供のようになっすぐだ。

「どうしてリングが赤いのか」と子供に聞かれているような気持ちになる。

「あ、いや——」

「魔物も人間を殺すよ？ 食べるためにねっ。自分の命を繋ぐ行為だよねっ？ ヨシトは今、何のために殺したいの？」

「……………」

はつきり言って衝撃である。

異世界に来てから感覚がおかしくなってしまったのだろうか。なんの躊躇もなく、生物を殺せと俺は言い、リモアはまるで博愛主義者みたいなことを言う。

（これ、ひよっとしたら、魔物と人間の感覚の違いだからで済ませていい問題じゃない気がする。リモアの問いに対して答えられない自分がいる）

魔物に襲われてるわけでもない。むしろ襲ってこないのだから諸手を挙げて喜ぶところだ。だが、俺は今、魔物を呼び寄せて殺そうと考えていた。

（恐ろしい……俺はどうしたんだ……）

リモアは何も追及せずに、俺を推し測るようにじっと見つめていた。

俺たちは急に口数が少なくなってしまった。

いや、俺が喋れなくなった。

昼間のリモアの問いかけが、楔のように俺の心に刺さっている。

夕飯を作り、テントを広げ、眠りにつく。

今日は吸血もない。

シマはもちろんだが、二人ともほぼ無言で一緒にベッドに入った。

俺はあまりに考えることに没頭していて、そのときは気づかなかった。

リモアが一日中俺の顔を見ていたことに。



徒歩で移動を始めて三日目だ。順調に旅は進む。

俺の胸中以外は。

夕方になるくらいだろうか、簡単な柵で囲まれた村らしきものが見えてきた。

普通に村に入ろうとすると——

「何しに来た」

入り口にエルフの男が立っていた。ブロンドの髪のはっそりしたイケメンだ。腰には剣を差している。

「あつ、俺はケーンズから旅をしていて、今日はここで泊めてもらえないかと思ったんで

すが」

「人族を泊める家はない。帰れ」

怒鳴りつけられたりはしてないが、とりつく島がない感じだ。

ふと隣で動いているものが視界に入った。そちらを見ると、リモアがエルフに対し、俺の顔を指でさし示している。

そして、俺のけつを押して、背中を向けさせる。

「なっ！！！！！！ まさか！！！！」

突然、エルフは大声を上げた。

「し、しばし待たれよー」

そう言うのと、風のように走っていった。どうやらメイがそうだったように、エルフは紋章を持つ者を勇者として扱うことを、リモアは利用したようだ。

俺はリモアをジト目で睨む。

「それ、やっちゃう？」

「このほうが早いじゃんっ！」

「つうか、なんでそんなことまで知ってんだよ……ほんとに魔物かよ」

「いーじゃん！ リモアがいるんだから、ヨシトは安全だしっ！」

「ほんとかよ、つたく」

すると、大勢のエルフが押し寄せてきた。中央には年老いたエルフがいる。

その年寄り以外の村人全員が、俺の前に来るなり、片ヒザをついて頭を下げた。

「勇者様、遠路はるばるお越しいただき、ありがとうございます」

と言ってから、年寄りの頭を下げる。

「いや、勘弁してよ。泊まりたかっただけだし。……ほら、頭を上げて」

エルフ全員の頭を上げさせた。

（すげー効果だな。さすが勇者つか？ まあ、ドン引きだが）

「ありがとうございます。本日はささやかながら、勇者様をおもてなしさせていただきました
ます」

「いやいや、なんもしてないから。……つうか、迷惑なら野宿で大丈夫だし」

「とんでもない！！！」

年寄りは年に似合わない大声を上げる。

「我々にお任せください。ささつ、どうぞ中へ」

ニヤニヤしているリモアを見下ろしながら、俺は気まずいまま村に入っていく。
幸いなことに、リモアの楔を今だけは忘れることができた。

「勇者様、失礼を承知（しやうち）でお願いいたします。皆に紋章のご威光（いこう）を施（ほ）してはくださらぬでしようか」

「……」

村の中に招き入れられ、俺とシマ、リモアは歓待（かんだい）を兼ねて宴会を開いてもらったのだが、始まってそうそうにこれである。

俺は軽くため息をつき、仕方なく首筋をみんなに見せた。

「……」

盛大な歓声（きやうせい）が上がる。

ぶつぶつと何かをつぶやいたり、手を合わせたり、中には拝（わが）むやつまで出る始末。

（つか、メイの方がましなんじゃねーか？　これがモノホンの聖龍教か……。あー、やりづれえ）

俺は半分自棄（やけ）になった。

「あー、無礼講（ぶれいこう）で頼む。男も女も無礼講だ！　君、ちよつと来て」

俺は年寄りの隣に座っている若い男を呼ぶ。彼は俺が声をかける前からガチガチに緊張（きんじやう）していた。

「は、はい！」

怯（おそ）えるように近づいてきた彼を、俺の前に座らせる。

「いいか？　俺の真似（まね）をしろ？　わかるな？」

「は、はい！」

いくらなんでも、ビビりすぎじゃなからうか。俺はこの男の肩に右手を置く。

「……真似（まね）して」

「え？」

「真似（まね）して」

「む、無理です！」

まるで俺が脅（おど）しているようだ。

「やらなきゃ帰る。真似（まね）して」

ブルブルと震え上がるエルフの男に、年寄りが指示を出す。

「お真似（まね）しなさい」

「ですが……」

「お真似（まね）しなさい」

「は、はい……」

お真似（まね）しなさいなんて言葉はねーよって突っ込みたところだが、話が進まないからここは我慢だ。

